



西日本新闻 文化版 1988 年 9 月 26 日~10 月 8 日

懒汉也动起来

九州派的运动不仅限于美术领域，更具有强烈的时代和社会属性。无论是煤矿接连关闭、三池争议还是安保斗争……他们或参与社会运动，或以社会为题进行创作。美术是时代的镜子。一旦社会趋于稳定，画家们往往容易各自蜷缩在自己的壳里。

在热气翻涌的九州派中，小幡英资虽参与所有行动，却始终以冷静目光审视运动。他常感“自己不过在演绎滑稽戏码”。然而当热潮退去，众人回归自我世界时，这位看似消极的男人开始投身社会与地域事务。在地区手工美术展等活动中展现出卓越创意与行动力。“渴望永葆当代人身份”的信念，驱使着这个天生懒散的躯体不断前行。

与他并肩行动、经营多家画塾、支撑着对金钱漠不关心的丈夫的，是妻子大黑爱子。这位原九州派成员，在团体解散后与小幡携手走过了二十载春秋。

放弃教职投身绘画

曾居于福岡市荒江的小幡被称为“荒江的丈夫”。有人说“因为他是个超级好人”。他确实有种温柔——会特意为饿着肚子的朋友捞泥鳅款待，但同时也是个令人不太放心的丈夫。

二十六岁时，他因“孩子们太早熟，没意思”辞去小学教师职务。刚离职不久的 1958 年，他加入九州派，而大黑正身处其中。

1960 年，他计划在东京银座画廊举办个展，着手创作十幅 300 号巨幅作品。然而展览开幕前四个月突患急性肝炎入院，只得放弃。他常想：若当时能如期举办展览，定能大放异彩。同年三十岁时虽重返教职，却感慨道：“那时本该拼尽全力作画，即便吐血也要坚持。结果教师和画家都成了半吊子。”

这般念头日渐沉重，最终在四十四岁时彻底放弃教职。契机是有人劝他报考教长考试，他当即激烈抗拒。

花、风景、少年画

1961 年九州派东京展时，大黑挑战了一件作品——将从有田抱回来的廉价瓷盘数百枚粘贴在六块胶合板上。九州派曾拥有这样的力量，能激励二十出头的年轻女性高呼“既然要闯荡东京，就得做出惊世之作”。小幡和菊畑茂久马（福岡市）前来协助，更令他欣喜不已。对大黑而言，九州派就是她的青春。

两人愈发感到寂寞，是在九州派活动结束后。1968 年第二届九州·现代美术动向展上，大黑在桧木板上绘制了数十个胎儿。当时她正怀着身孕，却在作品完成前流产了。“那本该是我的代表作”她如此说道。

九州派时期她创作的画作充满张力，后来却逐渐转向描绘花卉、风景、少年等温润题材。她开始珍视“日常事物间的细微触碰”。这或许也与她诞下两个孩子有关——如今他们已成长为高中生。

享受创作的乐趣

约十五年前起，小幡便定居于福岡市西部的小户海岸附近。他钟情于这片能将博多湾尽收眼底的海滨之地，持续以圆形与三角形构图描绘小户的落日意象。

1980 年，她举办了名为“首届小户物产展”的别具一格的展览。展品包含两人绘制的小户风光与小鱼图，辅以友人摄影作品，更陈列了亲手栽种的萝卜、里芋，以及海滩沙石等物件。这是将生活整体升华为艺术的尝试。

1982 年西区美术展期间，她抛开丈夫的懒散作风，四处奔走寻找会场、联系参展者、布置展区。几位居住在其他区的九州派同好也前来助阵。由此契机，她与爱子及数位画家共同创作了西区政府大楼大厅的壁画。

1983 年福岡县知事选举期间，举办了“展现丰饶县政的作家展”。这场将激烈保守派与革新派对决转化为文化庆典的尝试中，七十余位画家、作家、学者携作品参展，议员们也现身参与，由此催生了关于文化行政的讨论。

小幡和大黑正乐呵呵地享受着这类行动。独自创立九州浪漫派、连名片都印上浪漫主义标识的 58 岁小幡，正与这位绝佳搭档以洒脱不羁的玩心姿态活着。

前衛の軌跡

九州派から四半世紀

<6>

小幡 英資
大黒 愛子

福岡市

無精者が動いて九州派の運動は美術だけでなく、時代・社会的な側面も大きく、炭鉱の相次ぐ閉山や三池争議、安保闘争……社会の動きにかわり、あるいは社会をテーマに制作した。美術は時代を反映する。社会が安定してしまえば、画家もそれの後に閉じこもってしまいがちだ。

同時代人である うと思ひ続けて

熱気が過ぎた九州派で、すべての行動に参加していなかった小幡英資は、どこかさめた目で運動を見ていた。「自分は、二つけないことを信じている」という気があった。もう二十年になる。

福岡市荒江に住んでいた小幡は「荒江の自派」と呼ばれた。超然としていたから、入院して断念、その個展が実



小幡英資さんの近作の前で。左は大黒愛子さん

花、風景、少年画
大黒は三十八年の九州派東京展の時、有田から抱えきつた。大黒にとって九州派が青春の血をへき板六枚に染められた。二人が親しさを増すのは、何百枚も張りつけた作品に挑んだ。二千年前半の女性に東京に送り込むのだから、すぐてからだった。四十三年の第2回九州・現代美術の動向展が、九州派にはあった。小幡で、大黒はヒノキの板に何十

は、旦那の無精者を捨てて会合探し、出張講演、会場作りと動き回った。他区に住む九州派の仲間も数人参加してくれた。これがきっかけで西沢役所ロビーの盛福を多子や数人の画家と制作することになる。

五十八年の福岡県知事選の最中には「豊かな真政をアピルする作家展」。激怒な保守革新文化のお祭りの道員にして染しもの試みで、作家、学者ら七十人が自分の作品を持ち寄り、議員たちも顔を見せ文化行政に参画する討論も生じた。

小幡と大黒は、こんな行動を「ヤニヤシ」ながら楽しんで、五十五年の第一回小幡物展展という風変わりな名の展覧会を開いた。二人が描いた小幡、格好の相棒とひょうひょうと遊び心で生きている。

九州派展 10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館。

